神奈川県立総合教育センター長期研究員研究報告 10:31～36. 2012

中学校音楽科における豊かな表現力の育成

― 言語活動を取り入れた合唱の授業を通して ―

松　本　　恵[1]

音楽を形づくっている要素を学習の支えとしながら、自分のイメージや考えをいかして豊かな音楽表現をすることが求められている。本研究では、楽譜から読み取ったものを表現する方法について、言語活動を通して考えを深めていく授業実践を行った。その結果、生徒自身の思いや意図をいかして音楽表現を工夫する力の育成に成果が認められた。

はじめに

平成22年７月の「特定の課題に関する調査（音楽）調査結果（小学校・中学校）」（国立教育政策研究所2010）において、「言語活動を適切に取り入れるよう指導を工夫する」(p. 235)「音楽を形づくっている要素を手掛かりにしながら思考・判断し，音楽を豊かに表現したり鑑賞を深めたりする指導を充実する」(p. 237)という課題が挙げられた。

また、平成20年３月に告示された中学校学習指導要領においては表現と鑑賞の活動の支えとなる指導内容が〔共通事項〕として示された。音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成などの音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受すること、音楽に関する用語や記号などについて「音楽活動を通して理解すること」と記されており、活動の中で生徒自身が学習内容を実感できるような指導の工夫が求められている。

これまでの自分の実践では、生徒自身が感じ取った音楽に対するイメージについて意見交換をさせたり、音楽活動を通して表現の方法を工夫させるなど、言語活動を通して考えを深めていく授業を積極的には展開できずにいた。そのため、音楽に関する用語や記号をはじめとする学習で得た知識が表現活動と切り離され、生徒自身の思いや意図をもった表現へと発展できずにいたと考える。

研究の内容

１ 研究テーマの設定

(1) 音楽科が目指すもの

平成20年１月、中央教育審議会から示された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学学習指導要領の改善について（答申）」において、「音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成すること」が、学習指導要領改善の基本方針の一つとして示された。これに基づき改訂された中学校学習指導要領では、「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して，音楽を愛好する心情を育てるとともに，音楽に対する感性を豊かにし，音楽活動の基礎的な能力を伸ばし，音楽文化についての理解を深め，豊かな情操を養う」と示されている。

(2) 音楽科における言語活動の必要性

言葉にできないものを表現することが音楽のよさなのではないかという考え方もある。だが音楽の「よさ」を感じるためには、まず自分なりの解釈を具体的にもつ必要がある。イメージとしての解釈を具体化するのは言葉の力である。さらにその言葉を用いて他者と交流することで、自分にとっての音楽の価値意識を高め広げることができる。

また、鑑賞だけでなく表現の活動においても、言葉で伝え合うことを通して仲間とともに創意工夫することが、音楽表現の喜びをさらに高めると考えられる。

言語活動を通して音楽に主体的に関わる経験を重ねることは、「生涯にわたって音楽に親しんでいく態度」を養うことにつながると考える。

(3) 音楽表現の能力について

音楽表現の能力について明確な定義付けはされていない。音楽表現に対する価値観は多種多様であり、その概念を一致させることは難しいからである。

田畑 (2007) は学校教育における音楽表現活動で「音で考える」という側面の重視を訴えている。「音で思考する音楽表現活動を行うために必要な能力」として、「①音でイメージする能力（イメージ力）②音で感奮する能力（情動喚起力）③音で認知・解釈する能力（演奏解釈力）④音で共に感じる能力（共感的理解力）⑤音で表現する能力（表現技能力）」の五つの基本能力を示している。

これらを踏まえ、本研究における音楽表現の能力を「身に付けた知識・技能を活用しながら自分の思いや意図を他者と伝え合い、それを音や音楽で表す力であ

１ 厚木市立林中学校
研究分野（授業改善推進研究 音楽）

る」とし、合唱の授業を通して自らの音楽表現の能力を高めようとする生徒を育成することを目指した。

２ 研究仮説

これまでに習得した知識・技能を基盤に、言語活動を通して考えを深めていく授業展開の中で思いや意図の共有がなされれば、基礎的・基本的な知識・技能の定着が図られるとともに、個人や集団としての表現力はさらに高まるであろう。

斉藤（2009）は、音楽科授業においての言語活動の役割として次の三点を挙げている。「音楽の仕組みを具体的な存在にし，共有することを可能にする」「音楽の諸要素がもたらすわずかな質の違いを識別する」「表現行為の意識化を図る」と述べ、言語活動が有機的に機能する音楽科の授業構成を提案している。

しかし、これまでの実践からは「思いを言葉に表したり，グループで話し合う活動に時間がかかり，歌唱表現の練習の時間が十分確保できなかったグループもあった」（井上 2010）や、「生徒が考える授業は、時間がかかり、なかなか効果が上がらない」「言語活動を充実させるため、学習形態を工夫するとよかった」（好岡 2009）など、言語活動を取り入れた授業展開における活動時間の確保と学習形態の工夫が課題に挙げられている。

これらを踏まえ本研究では、自分の考えを言葉や文字で表す活動や、思いや意図を他者と共有するためのグループ学習の学習形態を工夫し、「知る・感じる・考える・伝える」というプロセスの中で言語活動を充実させることが、豊かな表現力の育成につながるであろうと考えた。

３ 研究の手立て

(1) 事前・事後に行った調査

生徒の実態把握と授業後の変容を測る目的で、「特定の課題に関する調査（音楽）」（国立教育政策研究所 2008）の設問を基に、音楽の学習に対する意識アンケートと音楽の学習調査を行った（事前は７月、事後は10月に実施）。事前と事後は同じ設問であるが、学習調査においては楽曲に若干の変化を加えた。

(2) 授業を実践するための工夫

ア 学習形態の工夫

グループ活動の形態を、パート別、全体、生活班の３パターンとして効率化を図った。生活班とは、各学級で組まれた５～６人の小集団で、日常生活において係活動に取り組むための協同の組織である。この生活班を活用した理由は以下の利点によるものである。

- 意見のまとめ役としてのリーダーがいるので、進行がスムーズである
- 各パートの生徒がいるので様々な角度から意見が交わされる
- 新たに組織を組む必要がなく、時間が短縮できる

イ 有機的に機能するための工夫

(ｱ) 楽譜と学習内容を組み合わせたワークシート

歌唱をしながら学習の内容確認をしやすいように、楽譜とワークシートを組み合わせた。音楽の用語や記号の学習や生徒自身の考えについて、記述しながらまとめていく形にした（第１図）。

ワーク6【速度の変化について】
速度を変化させることで ⑲ ＿＿＿＿ などの効果が期待できます。⑳ 小節目の ㉑ ＿＿＿＿ の歌詞の部分を、㉒ ＿＿＿＿ と表現したいので、㉓ ＿＿＿＿ ように歌ったらよいと思います。音楽の記号ならば ㉔ ＿＿＿＿ という記号で表すのが、一番近いイメージです。
この記号は ㉕ ＿＿＿＿ という意味を持っています。

第１図　ワークシートの一部

(ｲ) 付箋紙の活用

市販の付箋紙の利用に加え、スプレーのりを使って印刷済みのシートを付箋紙（気付きカード）として使用した。掲示後は個人に返却し、ワークシートの一部としても使用できる（第２図）。

【録音を聴いて気付いたことを記入しよう】
(1) ＿＿＿＿ の部分の
(2) ＿＿＿＿ について
(3) ＿＿＿＿ と聴こえたので
(4) ＿＿＿＿ と感じました。
(5) ＿＿＿＿ な練習方法を提案します。

第２図　気付きカード

(ｳ) 楽曲提示の工夫

歌詞から喚起されるイメージについて考えさせることを授業展開の導入とするため、楽譜に記載されている音楽の用語や記号を削除した。原譜は第７時に学習のまとめとして配付した。

４ 検証授業

(1) 検証授業の概要

実施期間：　平成23年９月２日～９月29日
対象生徒：　第３学年４学級（115名）
授業時数：　８時間（１～４時は自由曲練習と並行）
題材名：　楽曲の仕組みを読み解きながら、思いや意図をもった表現を工夫しよう
教材名：　「野空海（のぞみ）」
　　吉岡ひとみ作詞/作曲　松井孝夫編曲

本題材で身に付けさせたい力を「歌詞の内容や曲想を味わいながら、音楽を形づくっている諸要素の働きや関わりについて楽譜から読み解く力」「感受したことについて言語活動を通して互いの考えを伝え合い試行錯誤しながら、自らの思いや意図をもった表現を工夫する力」とした。

歌詞の解釈と曲想記号について考えを深めることからスタートし、音楽を形づくっている要素について学習を進めながら、生徒自身が思考・判断していく場面を徐々に増やしていく組み立てとした。

(2) 楽曲の選定

校内合唱コンクールにおいて、学年全員で合唱する「学年合唱曲」としての扱いとした。歌詞の情景をイメージしやすいもの、音楽の用語や記号が比較的少ないもの、できる限り生徒が認知していない新しいものという観点で楽曲を選定した。

(3) 検証授業の様子と展開

ア　１次【歌詞の内容や曲想に関心をもつ】

楽曲に対するイメージを拡大するために、歌詞のみを提示し二つの課題を出した。一つは曲名や曲想・速度や強弱について文字で記述するもの、もう一つは歌詞の内容が表すイメージ画（第３図）を描くことを夏休みの課題（０時）とした。１時には、提出された意見を基に話し合い、クラスごとに曲名と曲想を表す言葉を決めた。話し合いが予想よりスムーズに進行したのは、生活班を利用したことと役割分担を明確にしたことが起因していると考える。

第３図 イメージ画の例

イ　２次【音楽を形づくっている諸要素の知覚・感受】

記号を削除した楽譜を配り、音価とフレーズのまとまりについて（２時）、歌詞から喚起されるイメージを基にした強弱表現について（３時）考えた。例えば「なんでもしってる」という歌詞の部分の歌唱方法について、「 ***f*** フォルテ（強く）で歌うと知ったかぶりみたいになるから ***p*** ピアノ（弱く）のほうがいい」という意見に対し、「なんでも知ってるっていうのは、ぜんぶ知ってるってことだから ***ff*** フォルティシモ（とても強く）でもいいはずだ」など、既習の音楽の用語や記号を活用しながら話し合う姿が見られるようになってきた。

また、強弱記号のイメージを言葉で表す活動では、個々の考えを付箋紙に記述し、それらを掲示して他者の意見も共有できるようにした。

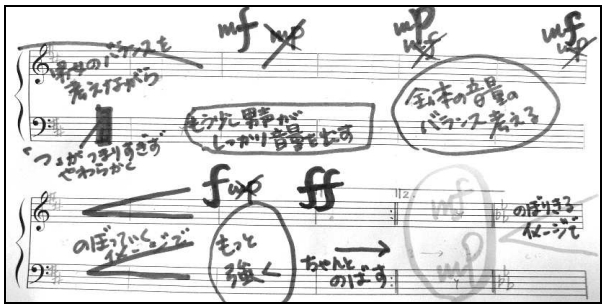
《生徒の記述例》
○***mp*** メッゾピアノ（少し弱く）の部分
・１歳の子のほっぺみたいにやさしく
・おばあちゃんがやさしく猫をなでているような
・春のうららかな陽ざしのように
○***mf*** メッゾフォルテ（少し強く）の部分
・一人じゃないよというように気持ちをこめて
・思いをこめて熱く語る感じに

書くことが得意ではない生徒も、仲間から出された意見を参考にしながら自分の言葉で記述ができたことで、音楽の用語や記号についての理解を深めることにつながった。これらの活動に基づき、各グループで歌唱表現の方法を決めた。

ウ　３次【音楽を形づくっている諸要素の知覚・感受と課題解決】

前時までに自分たちで決めた歌唱方法で合唱・録音したものを鑑賞し、気付いたことを個々でワークシートに記入した（４時）。

５時では、４時で出された意見を記入した拡大楽譜（第４図）を使用した。一部の生徒の音楽解釈に偏らないように、意見を交換し共有する場面をできるだけ多く設け、全体で歌唱して試しながら表現方法を一つに絞っていった。



第４図　意見を記入した拡大楽譜の一部

あるクラスでは、曲の後半に向けて***mp***メッゾピアノ（少し弱く）から***decresc.***デクレシェンド（だんだん弱く）して、次第に静かになっていく歌唱方法を提案していた（４時）。しかし５時に、「音が上行形になっているから***cresc.***クレシェンド（だんだん強く）した方がいい」という意見が出され、両方の表現方法を実際に合唱して試した。すると、後者の合唱の後、「あ～こっちだ、絶対こっちがいい～」という声があがった。なぜそのように感じたのかを質問すると、「歌ってみてそう感じたっていうか、みんなで最初に決めた『生き生きと爽やかに』の曲想記号に近いのはこっちだと思うから」という答えが返ってきた。まだ感覚的なものではあるが、「言葉では表せないもの」と「言葉で表したもの」が実際の音楽表現と結びついた瞬間であった。

６時では、楽曲全体の構成を意識しながら速度変化のもたらす効果について扱った。

以下は、速度変化について生活班で話し合いを進めた際の授業記録である。（Ｓ：ソプラノパート生徒　Ａ：アルトパート生徒　　Ｔ：男声パート生徒）

Ｔ：最後のフレーズは***rit.***リタルダンド（だんだん遅く）すると曲の終わり感が出ると思うな。
Ｓ：ソプラノは音が高くて、***rit.***すると息がもたないから無理だよ。
Ｔ：じゃあ、***accel.*** アッチェレランド（だんだん速く）する？
Ｓ：速くなったら曲が終わる感じがしないと思う。
Ａ：じゃあ、息がもつ人は一気に歌いきって無理な人は単語の区切れで吸えば大丈夫じゃない？
Ｓ：楽譜には何て書けばいいかな。
Ｔ：（無言で教科書をめくり始める）
Ａ：なんかそういう記号、今までにもあったよね。
Ｔ：あった。Ｖブレス（息つぎ）のマークに（）かっこがついた記号が教科書に載ってるよ。

このように音楽の用語や記号を交えた話し合いが行われた。速度変化による効果について考える中で、自分以外のパートの音の流れやフレーズのまとまりに関

して意識をもつことができている。さらに、息つぎの方法について意見を出し合い、記号については教科書に戻って確認するという課題解決が行われた。生徒自身の思いや意図をいかした音楽表現を工夫できた展開となった。

エ　４次【自らの思いや意図をいかした表現方法の工夫】

７時では、学習のまとめとして原譜を提示し、自分たちの考えた表現方法と作曲者の考えた表現方法の比較を行った。楽曲に込められた作曲者の思いに触れ、「なるほど、納得した」というような表情を見せる生徒も多かったが、「ここの部分は、私たちが考えた強弱のほうが『ひとつ』という歌詞の意味に合った表現方法だと思う」という意見もあがった。授業後の生徒の感想には、「夢中になって記号や強弱について考えてみて、作曲者の思いを改めて知ることができた」という記述があった。これらは、言語活動を取り入れた授業の中で、生徒が主体的に楽曲を読み解いたからこそ得られた気付きであると考える。

また、「みんなで考えたことを何度も歌っていくことで、どんどん曲が良くなっていった」「自由曲もみんなで意見を出し合ってより良い曲にしたい」などの感想もあった。これらは、自分たちで創意工夫して音楽表現する喜びや、集団としての表現力の高まりを生徒自身が感受できたと考えられる記述である。

さらに、曲の最後の***rit.***部分がゆったりと美しく歌われた範唱を聴き、「あんなふうに響く声で歌えるようにするにはどうしたらいいのだろう」「発声練習がもっと必要だと思う」など、基礎的・基本的な技能の必要性についての発言も聞かれた。

「わからなかった記号がわかるようになった」「〈縦のつながり＝和音〉と〈横のつながり＝フレーズのまとまり〉両方に大きな意味と意図があることを知った」など、音楽の基礎的・基本的な知識についての理解が深まったと考えられる記述も見られた。

５　検証結果

(1) 事前・事後の変容

ア　意識アンケート調査から

音楽の学習に関する意識アンケート調査では、音楽を形づくっている要素や言語活動を取り入れた授業への関心・意欲などの意識の高まりについて11項目の調査を実施した。

各項目において、「４：そう思う」「３：どちらかといえばそう思う」「２：どちらかといえばそうではない」「１：そうではない」の４段階で回答させ、４もしくは３と回答したものを肯定的な回答、２もしくは１と回答したものを否定的な回答とした。

第１表は、肯定的な回答をした生徒の割合を、検証授業の前後で比較したものである。

項目①については、事後調査において91％もの肯定的な回答が得られた。これは第１時で歌詞から喚起されるイメージについて考えを深めていった授業の成果と考えられる。項目③では、継続的にフレーズのまとまりや音符・休符の長さについて、題材全体として意識をもたせた授業展開であったこと、項目⑥については、生活班を利用した話し合いの中で、自分のパート以外の音楽構造についても知ることができた結果、互いの意識を高め合うことにつながったと考える。

第１表　意識アンケート調査で肯定的な回答をした生徒の割合

意識アンケートの項目	事前	事後
①歌詞の内容を味わっているか	85%	91%
②歌詞（言葉）の発音や発声の仕方を工夫しているか	85%	87%
③音符や休符の長さを意識しているか	81%	92%
④その曲にふさわしい強弱や速度の工夫をしているか	82%	85%
⑤旋律やリズムの特徴をいかす工夫をしているか	72%	80%
⑥自分のパートの役割をいかす工夫をしているか	78%	91%
⑦音楽全体の仕組み（※要素同士の関わり）を考えることはあるか	52%	78%
⑧友だちと一緒に表現することに喜びや楽しさを感じることはあるか	86%	89%
⑨音楽のよさや美しさを感じることは好きか	91%	95%
⑩音楽から感じ取ったことを言葉や文章で表すことは好きか	52%	65%
⑪これまでに学んだ音楽の用語や記号などの学習を、実際の表現活動にいかしているか	65%	84%

また、言語活動を通して他者と意見を交換し合いながら、音楽には様々な感じ取り方があることに気付けたことで今まで以上に音楽のよさを感じることができたとともに、言葉や文字で表すことに対して楽しさを感じられるようになった（項目⑨⑩）。

さらに、自分たちで考え創造しながら音楽表現の工夫を進めていったことによって、音楽の用語や記号の学習が実際の活動にいかされているという意識が高まった（項目⑪）。学びが実際の表現活動にいかされていると実感することは、音楽活動の喜びや学習意欲の高まりにつながる重要な意識である。

イ　音楽の学習調査から

音楽を形づくっている要素についての認識の程度を調査した。鼻濁音や子音の発音についての記述式問題以外は、すべて楽譜を見ながら教師による演奏を聴いて答える設問とした（第２表）。

第２表　音楽を形づくっている要素に関する学習調査の通過率の比較

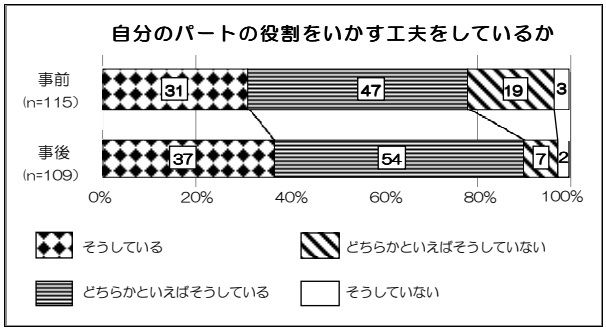
学習調査の項目	事前	事後
①フレーズのまとまり	93%	99%
②強弱の変化について（強弱記号の名称）	76%	87%
③強弱の変化について（強弱記号の意味）	81%	93%
④速度の変化について（速度記号の名称）	59%	67%
⑤速度の変化について（速度記号の意味）	73%	89%
⑥音符・休符の長さとリズムについて	36%	42%
⑦パートの役割について（支える旋律）	54%	68%
⑧パートの役割について（関わり合う旋律）	52%	71%

事後調査において、項目①のフレーズのまとまりに関しては99％、項目②③の強弱記号については、約90％

の生徒が記号の名称と意味の両方について理解できたという結果が得られた。項目⑥の音符・休符の長さについては事後で42%と他の項目に比べると低い数字ではあるが、事前と比較すると６ポイントの伸びが見られた。通過率が特に増加した項目③⑤については、検証授業の中で重点を置いて取り組んだ項目である。音楽の用語や記号を交えながら話し合いや記述をしていく活動を取り入れることによって、基礎的・基本的な知識である音楽の用語や記号の意味についての理解が深まったと考えられる。これらの結果は、言語活動を取り入れた授業展開が学習内容の定着にもつながったことを示していると考えることができる。

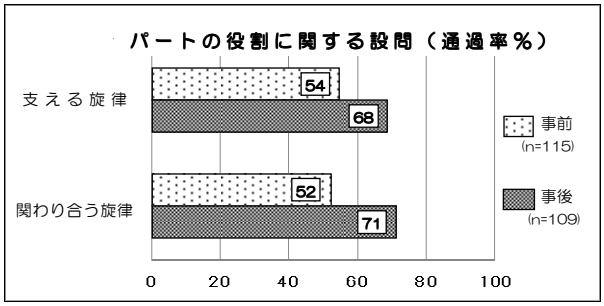
ウ 意識アンケート調査と学習調査の比較から

第１表で示した意識アンケート調査の項目⑥の内訳は以下のようになっている（第５図）。



第５図　事前･事後調査における意識の変化

事前と事後では、「そうしている」と回答した生徒は６ポイント、「どちらかといえばそうしている」と回答した生徒は７ポイント増え、肯定的回答をした生徒が合計で13ポイント増加したことが分かった。



第６図　パートの役割に関する設問の通過率

意識アンケート調査の「自分のパートの役割をいかす工夫をしているか」（項目⑥）に関連している学習調査の項目を比較すると、パートの役割に関する「関わり合う旋律」の問いで19ポイント、「支える旋律」の問いでは14ポイントの通過率の伸びが見られた（第６図）。

これらの結果から、パートをいかす役割の意識の高まりとともに、パート同士の関わりや役割についての学習内容の理解も深まっていることが分かる。意識の高まりと音符や休符、強弱や速度、フレーズのまとまりなどの基礎的・基本的な知識の深まりが相互に作用した結果であると考える。

(2) 生徒の変容

「どうやったら伝えたい思いを相手に伝えられるのかを考えた」と書かれた感想があった。作曲者が何を表現したいのかを考えるだけではなく、自分の思いや意図について音楽を通して他者に伝えようとする生徒の意欲が感じられる。

また、抽出生徒のワークシートの記述を比較し、その質的な変容を見た。

ワーク4（第2時）	ワーク7（第7時）
【前半部分の改善点を発見しよう】	【原譜と比較しよう】 〈原譜を見て･知って、自分たちの表現法が素敵であると感じたこと〉
⑫ なんでも知ってる の部分の	㉙ なんでも知ってる の部分の
⑬ 音量バランス について	㉚「1. について
⑭ いまいち ちがう と感じたので、もっと	㉛デクレシェンドを次にいかして
⑮ 大きめに したほうがよい。	表現している部分です。

第７図　生徒Ａのワークシート記述 第２時と第７時

第２時のワーク４における生徒Ａの記述（第７図）では、全体のバランスについて意識がもてているものの「いまいちちがう」というような曖昧な表現であったが、第７時には「デクレシェンドを次にいかして」と、要素同士の関連を知覚できていると見とることができる記述をするようになった。

ワーク4（第2時）	ワーク7（第7時）
【前半部分の改善点を発見しよう】	【原譜と比較しよう】 〈原譜を見て･知って、自分たちの表現法が素敵であると感じたこと〉
⑫ ひとのであい の部分の	㉙ ちきゅうは の部分の
⑬ 強　弱 について	㉚ *f* と *cresc.* について
⑭*mf* なのにちょっと弱い と感じたので、もっと	㉛ だんだん強くして、偉大さを
⑮*mf* を意識して強く したほうがよい。	表現している部分です。

第８図　生徒Ｂのワークシート記述 第２時と第７時

生徒Ｂの記述（第８図）では、第２時では強弱記号の意味をなぞっただけの記述であったが、第７時では「だんだん強くして」と強弱記号の意味を添えて、表現したいイメージについては「偉大さを」という自分の言葉で表現している。これらの記述から、言語活動を取り入れた授業を通して、音楽の用語や記号の役割の理解とともに、音楽の要素がもたらす効果について意識が高まったと考える。

８時（所属校他教員による授業）に実施した演奏発表では、次のような結果が得られた。

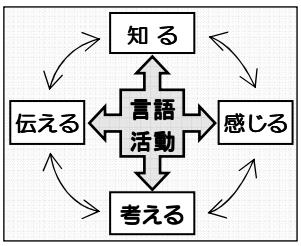
- 子音の発音を以前より意識できるようになった
- 強弱記号の関わりを意識しながら歌唱できるようになった
- 言葉のまとまりを意識してなめらかに歌唱できるようになった
- 曲想の変化に応じて自然に***ten.***テヌート（その音符や休符の長さを十分に保って）や***rit.***リタルダンド（だんだん遅く）して歌唱できるようになった

言語活動を取り入れた学習展開により音楽の基礎的・基本的事項についての理解を深められたことが、より豊かな音楽表現に結び付いた成果であると考えられる。

６ 研究のまとめと今後の課題

(1)研究の成果

音楽の構造・自分や仲間の考え・楽曲から読み取った作曲者の思いや意図などについて、「知る・感じる・考える・伝え合う」授業実践を行った。思いや意図が共有されることで集団の音楽の質が高まり、個人の知識の理解を深め、さらに互いの音楽性を高め合うというサイクルが繰り返された（第９図）。意図的な言語活動により音楽表現の能力は確実に豊かになっていくことが明らかになった。



第９図 共有のプロセス

また、言語活動を取り入れた授業は時間がかかるという先行研究等からの課題についても、話し合いのグループ分けやワークシートの工夫をしたことが効果的に働いたため解決された。楽譜と学習内容を組み合わせたワークシートは、歌唱しながら既習内容を速やかに確認できることで、感覚的だった事柄を確実に知覚するために有効であった。今後同様のワークシートを作成するにあたっては、楽曲の長さにより配列が困難であることが懸念されるが、身に付けさせたい学習内容の焦点を絞っていくことで、楽譜とワークシートを並列させることは可能であると考える。

(2)今後の課題

「歌詞の表す広大な世界の美しさと、そこに生ける命の輝きの両方を聴いている人に伝えるには、もっと全体の速度をゆっくり**Andante**アンダンテ（ゆっくりと歩くような速さで）にしたほうがいいと思う。だけど、そうすると何箇所か息が続かない。もっと発声練習をしたい」という生徒の声があった。音楽の用語や記号の意味、それらがもたらす効果、自分自身の思いや意図、表現するための技能習得の必要性について気付けている発言である。

演奏発表後には、「***mp***、***p*** などの〈弱〉になると息の支えがなくなり音がゆるんでしまう」「高音域の***rit.***の音が下がってしまう」「フレーズの終わりの音が伸ばしきれない」という感想が得られている。当然のことながら、楽曲への理解が深まりイメージが膨らむほど、生徒自身が表現したいように演奏するための技能が必要になる。呼吸法・発声法などの技能習得の必要性という課題について生徒自身が気付けたことは言語活動を取り入れた授業の成果でもあるが、言語活動の適切な取り入れ方とともに、技能の定着を図るための継続的な指導の方法をどのように工夫していくのかについて、年間を通した指導計画を見直す必要がある。

言語活動には、読む・書く・考える・伝え合うなど様々な学習形態がある。週１時間という少ない授業時数の中で着実かつ効率的に学習内容の積み重ねをするためには、話し合い活動に偏らないような言語活動の内容を整理していくことが課題であると考える。

おわりに

既存の楽曲を演奏するのであれば原点は楽譜にある。演奏者の独りよがりな解釈ではなく、作曲者の思いや意図に寄り添うことを忘れてはならない。「もっとこんなふうに表現したい」という生徒の思いや意図を、楽譜に重ね合わせることが大切である。

本研究の成果を踏まえながら、今後も言語活動を積極的に取り入れた授業展開を工夫し、自らの音楽表現の能力を高めようとする生徒の育成に努めていきたい。

引用文献

国立教育政策研究所 2010 「特定の課題に関する調査（音楽）調査結果（小学校・中学校）」
中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」 p.94
文部科学省 2008『中学校学習指導要領解説　音楽編』教育芸術社 p.19
井上唯一郎 2010 「思考力，判断力，表現力等を高めるための中学校音楽科授業の在り方～〔共通事項〕を基にした言語活動の充実～」（熊本県立教育センター『研究紀要』第39集）p.64
斉藤百合子 2009 「音楽科授業における言語活動の役割と授業構成」（京都教育大学『紀要』第115号）p.177
田畑八郎 2007 『音楽表現の教育学～音で思考する音楽科教育～』 ケイ・エム・ピー p.12-13
好岡裕子 2009 「授業のエキスパート養成事業（第３学年音楽科）授業実践記録」（http://www.esnet.ed.jp/center/cdata/shiryo/expert/18mishou/h22_mishou_kiroku.pdf（2011.5.2取得））

参考文献

音楽之友社編 2011 『New Original Chorus Album 新・中学生のクラス合唱曲集　MIDORI～繋がる輪～（混声版）』 音楽之友社
日本音響学会編 2011 『音楽はなぜ心に響くのか - 音楽音響学と音楽を解き明かす諸科学 - 』コロナ社
内田有一 2009 『音楽の読解力を育てる言語活動の授業 聴いて 考え 表現しよう』 ブイツーソリューション
キース・スワニック著・塩原麻里/高須一/共訳 2004 『音楽の教え方 音楽的な音楽教育のために』 音楽之友社
波多野誼余夫編 1987 『音楽と認知』 東京大学出版会
吉田秀和 2009 『之を楽しむ者に如かず』 新潮社